



平成 29 年 4 月 1 日 発行 第 21 号

目次

巻頭言

今後の京都是面白い？
今井 真正 …… 1

陶芸家のひとりごと

陶と音のハーモニー
大機 伸悟 …… 2

陶芸道中いざ凝り気

窯なし、工房なし、暇なし作家
私の生い立ち
吉田 貢 …… 4

私の作品自慢

穴窯との出会い
寺西 健二 …… 7

陶芸技術ノート

石膏型を使った小鉢の制作
今井 真正 …… 9

展覧会見聞録

川本喜八郎 人形ギャラリーを訪ねて
寺池 尚孝 …… 14

活動報告 …… 15

会員便り …… 17

編集後記 …… 18

編集委員会

委員長 今井 真正

委員 片岡 俊彦 増田 淳三 稲垣 薫

巻頭言

今後の京都是面白い？

会長 今井 真正

今年は、大政奉還から 150 年ということで、京都でもそれにまつわるいろいろな行事が企画されているらしいです。武家の社会から庶民の社会に移行した大切な節目を、振り返る事ができると思うので、私も楽しみにしております。

昨年末、大丸が創業 300 年を迎えるということで、祇園の町屋に大丸祇園店をオープンされました。当初は、HELMES 祇園店として運営されています。



開店した HELMES 祇園店

パリのファッションリーダーと京都の古い街並みがどのように発展するか楽しみなところであります。このオープンをお祝いする会が行われ、参加させてもらったのですが、その時に大丸の社長が歴史のことについて話されておりました。その中であの有名な新撰組のユニフォームは大丸が注文を受けて、デザイン製作したそうで、「大変名誉なことではありましたが、残念ながら代金はまだお支払いいただけていない。」というお話をされていました。



大丸 300 年記念式典は祇園八坂俱楽部で行われ、懇親会は一力で盛大に行われました。

京都に住んでおりますと、いろいろな機会に興味深い歴史の話を知ることがあります。歴史文化にリアリティーがあり、身近なところで感じることができるのは、京都の面白いところであり、奥深いところではないでしょうか。

皆さんもニュースでもご存知かと思いますが、数年後には文化庁が京都にやってきます。具体的にどのようなになるかはわかりませんが、大きな文化拠点ができるということに間違いのないと思います。たまたま現文化庁長官は私が学生時代にお世話になっていた先生で、同じく工芸家でもあります。気軽にお話できる方なのでこちらも楽しみにしています。

当クラブも京都に存在するクラブです。今後の運営についても、京都にあるということをもっと活かした京都を楽しめる事業を行うべきではないかと考えています。いいアイデアやご意見がありましたら何なりとご提言いただければありがたいと思っています。

陶芸家のひとりごと

陶と音のハーモニー

陶芸家 大機 伸悟

精華大学を卒業し、今井眞正先生に弟子入りしてから 5 年が経とうとしております。当初は陶芸の知識が全くなく、作家の名前や住所、作品をひたすら覚える毎日でした。陶芸家たるもの、物作りをひたすら熟す事かと思っていましたが、先生方と関わっていく中で物の見方や社会に対する感覚、礼儀作法を教わり、特に先生は人との付き合いをととても大切にしておられ、人との付き合い方や身だしなみなど陶芸とは違った場面でも勉強させて頂いております。もちろん陶芸に必要な技術や道具なんかもです。

大学時代は何故か強気で、「卒業しても何とかやっていけるだろう」などと思っていましたが、弟子入りする事によって大きく人生が変わったと実感しております。

さて、僕がそもそも眞正先生に弟子入りするまでに「陶芸」との縁を強く感じているのも、僕の生い立ちに面白いストーリーがあったからなのです。

出身は舞鶴になるのですが、母親が陶芸をしております。小さいプレハブではありますが陶芸教室も営んでおります。ですから陶芸の土も幼い頃から土遊びの感覚で触れていました。母親が器を作っているのを真似して、生き物や乗り物も作っていました。

それが自然と土には触れなくなり、中学生の頃に衝撃を受けたのが X JAPAN の「紅」という曲でした。僕は少ないお小遣いやお年玉を貯めてドラムセットを購入し、ひたすら「紅」を練習する毎日。ある程度叩ける様になり、ドラムだけでは満足できずにギターやベースも親に頼み込んで買ってもらい、独りで「紅」を演奏できるくらいになりました。美術だけは成績が良かったので高校は美術コースのある学校を選んで入学するも、文化祭では一時的にバンドを組んで「紅」を演奏するほど音楽に夢中で、ミュージシャンを目指す程の

意識でした。精華大学を選んだ理由もその頃は音楽だけしか取り柄が無く、唯一経験があった陶芸を活かしてバンドメンバーを見つけに行く目的があったからです。ところが大学に入るも同じ音楽の価値観が合う人とは巡り会えず、同級生とバイクでツーリングしたり、恋人ができたりと、音楽は聴くくらいで陶芸も課題だけする日常になっていきました。そして三回生後半である転機が訪れます。

初めての失恋です。

とことん落ち込んで、打ち込んだのが陶芸でした。僕にとって失恋がとてつもないエネルギーになり、目の前にある土を積み上げて形にするのが楽しくて、次々と出来上がる作品に先生や同級生から驚かれる様子がたまらず、より制作意欲を強めていきました。気付けば四回生にもなり、自由制作から卒業制作まで、とても陶芸をしている実感が湧いてきました。音楽は自分の制作イメージに素直に影響し、音楽の「曲」と陶芸の土で作りあげる「曲」がリンクしたのです。



精華大学 卒業制作 「陶の妖艶」
左 102×70×22 (cm) 右 140×50×30 (cm)

初めての大作に挑戦しました。ヤジロベエのような重力に対してバランスをとっている作品に興味があり、土に無理をさせつつも形が成り立っているのが気に入っていました。

『バンドのイメージ構成』

- ドラムは音楽のリズムであり全体のアクセント
- ベースはリズムにメロディーの雰囲気(白黒の濃淡で表現するイメージ)
- これらは絵画でいう下絵、立体物だとフォルムとなる。
- そしてギターは色彩になり、ボーカルは言葉として伝えるメッセージになる。
- 全体としてはイントロとサビのようにどの部分を強調して見せたいか、伝えたいかになる。

このイメージは今も持ちつつ自分の作品を制作しています。

人と会話をしている時もですが、共感できたときはとても興奮し、楽しいものです。価値観や感覚もですが、格好良さや美しさ、可愛さやエロさなんかも感じさせる法則性も作品のフォルムや色合いにあるのではないかと考えています。



2013年 制作途中

陶芸道中いざ凝り気

窯なし、工房なし、暇なし作家
私の生い立ち

会員 吉田 貢



2014年 制作

小さい物には可愛さや、括れたラインはエロさなんかを感じます。そういった感覚を上手く刺激し、共感できたときに作品の存在が意味を成すのだと思います。

弟子をしながらも、休みを頂いては展覧会を拝見しに外へ出かけたり、自分の制作を営んだりしております。基本的には、技法は捻り作品が多く、そこから流れるようなラインを削り出していきます。

シンプルな作品ならではのスタイリッシュさと、触れたくなくなるようなラインを意識していますので、それが伝えられたのなら、とても嬉しいです。

よく眞正先生から指摘をされるのが「作品が固い」なのですが、最近になって少しその意味が分かかってきた気がします。確かに、土という素材感を殺しているのかもしれませんが。僕自身、実際に漆の作品に興味を引かれる事が多々あります。僕にとって思考が素材の先を行き過ぎて、活かし切れてないのだと思います。

ただ、綺麗なラインを削り上げるのには、勝手ながら自信が有りますので、土という素材と向き合いながら良い作品になるように制作し続け、今後とも精進していきたいと思っています。

私は、幼い頃は少しからだが弱く、友達といえは“昆虫”で、小2の夏休みに父親から誕生日のお祝いに昆虫図鑑をプレゼントされたこともあり、昆虫の世界にのめり込んでいった。近所の二条駅の裏の線路脇にある草むらでは、カマキリ、バッタ、コオロギを採ったり、小学校の庭でのセミ採りや、池でトンボの幼虫のヤゴを採り、今住んでいる岩倉方面へはまだ薄暗い早朝に自転車をこいでカブトムシやクワガタ採りに出かけたりと、頭の中は虫のことで一杯だった。勉強はそっちのけの生活を高校三年生まで送る少年であった。夏休みは、毎日のようにお墓の横の道を抜け、帽子の上には懐中電灯、手には虫取り網をと、まるでジャングルに行く探検隊のような格好をして往復の日々であった。

大学受験の時、一般の大学へいくべきか、絵を描いたり、字を書いたりすることが得意であったので、美大を目指すべきかと考える一方、東京多摩動物園にある昆虫館のカブトムシ専属の飼育員になろうと考えたりもした。結局、美大を目指すこととなり、受験の結果、市立芸大や精華大の洋画科は不合格、嵯峨美大の版画科も不合格、さらに京都芸術短大（今の造形芸大）の一次不合格となり、散々な有様であった。最終的には、芸短大の陶芸に彫刻造形的なオブジェというものがある芸短陶芸コースの二次に合格し、ここから陶芸の道に入ることとなる。

最初、器に何の興味もなく、器の課題の手びねりやロクロにはほとんど見向きもせず、むしろ退屈な日々を送り、先斗町の水商売のバイトのほうが面白かったのが記憶に残っている。学祭の少し前から遊びながらロクロを回し、陶器祭の器（湯呑み、灰皿、壺）等を作ったら、意外や意外、自作の器が一点また一点と売れた。翌年の学祭の時、一人のご婦人がお越しになり、「一年前の鉄砂釉の

湯呑み、大事に使わせてもらっているよ〜！」と言われると、何とも言えない充実感に溢れ、人に使って貰えて喜んで頂いたということが、忘れられない記憶となった。このことがきっかけで、私の興味はオブジェから器へと移って行った。このように、学生時代に陶器祭を経験したことが、私にとっては、一つの大きな転換点となった。

芸短大2年までは、公募展はほど遠い存在でしかなかった。陶芸科2年の卒業制作展では、蝶をモチーフにした壺や平鉢を制作し、運良く陶芸科では大賞の学長賞を受賞することができた。芸短大を卒業したその年に、陶芸専攻科が設置されたので、あと2年間、陶芸をより深く勉強することができ、この間に、京展（初入選）、全関西展、工美展（初入選）、など、学生でありながら一般公募展に入選を果たすことができたのも幸運であった。専攻科ができた年、陶芸家の吉川充（よしかわみつる）先生が着任され、色々と的確な面白い指導をして頂き、ロクロを挽いてから壺の中を削る方法で、重かった作品も軽めに仕上がり、壺がやせた感じにならなくなった。卒業式（芸術短大の時も専攻科の時も）では、小川欣二先生は、わざとか？緊張してか？2回とも私の名前は呼ばれず、“ヨシカワ ミツル”になってしまったのは、芸短では有名な話である。



「象嵌彩蝶紋大壺」
（くすりぞうがんさいちょうもんおおつぼ）
芸短大時代に京展初入選した壺作品

学生時代は、特に昆虫をモチーフとして、壺、大鉢の制作に没頭する日々を送っていた。大学を卒業して就職する人、教職に就く人、実家に戻って陶器業を継ぐ人と色々いたが、私はサラリーマン家庭で育ったので、小川欣二（文齋）先生に清水焼団地の工芸会の木村盛康先生を紹介して頂き、そこで3年間弟子入りすることとなった。そこでは、先生に道具はほとんど自分で作り、掃除や草むしり、先生の助手をしながら、釉薬も独自のものを目指すという陶芸の本質を学び、人生において大変貴重な時間を過ごさせていただいたと感謝している。アルバイトやバンド活動などもやっていたので、疲労で倒れ、1年間自宅療養し、その間、陶芸から遠ざかっていた。何とか働けるようになった時、立命館大学書籍部のバイト先近くの平安陶芸教室で、また作陶活動を再開した。

この教室で制作したトンボぐい呑みが、当時フジサンケイグループ後援のアマチュア陶芸コンテストに応募して、金賞に輝いた。その役員をしていた、山梨の増穂登り窯代表の太田氏に出会い、後にはマルチアーティストの池田満寿夫氏出会い、八方窯で長期間焼成することとなる。それまで工芸中心に作陶活動を行ってきた自分にとって、池田氏のスケールの大きな芸術に大変な衝撃を受けた。用を度外視したオブジェ陶彫作品に度肝を抜かれ、自分の作品も変化した。

池田氏の専属の窯は、増穂登り窯の敷地内にあり、焚き口が正面3ヶ所、横焚き口が両端に2ヶ所ずつ、火袋に1ヶ所の合計8ヶ所の焚き口があり、四方八方から焚くことで、この呼び名が付い



山梨県増穂の登り窯

この敷地内には池田満寿夫氏専属の八方窯を初め、登り窯、穴窯の他に赤絵窯、塩釉窯など、8基の窯がある。

ている。窯はドーム型で、池田氏は、天井まで3 mもある窯の中で、シャモット（珪砂）を敷き詰め、ベニヤ板を敷き、その上に新聞紙を敷く。さらにその上には、縦横約2 mの、ピーターヴォーカスを思わせる作品群がよろめき立つ。ウッフ〜すごい！の一言である。会員さんの作品は、先生の作品を囲むように棚を組んで行くのであるが、私たちの40~50 cmの大壺がすごく小さく見える。力を吸い取られた感がある。



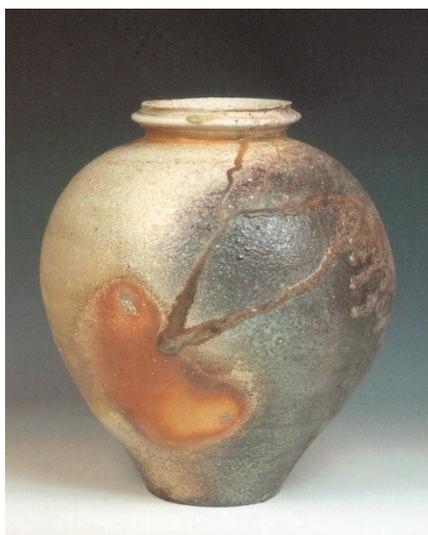
「塩釉縄文シリーズ」
増穂登り窯での塩釉焼成



「貝目大壺、蹲みの虫掛花入」
池田満寿夫八方窯で焼成した作品



「貝目窯変壺」
第39回日本伝統工芸近畿展で入選



「信楽貝目窯変大壺」
増穂登り窯での穴窯作品



「信楽炎彩文大壺」
第45回日本伝統工芸近畿展で入選

池田氏は 62 歳でこの世を去られたのだが、氏に出会い、寝泊まりを共にし、そばで制作活動を拝見できたのも、人生において貴重な体験であった。言うまでもなく、この窯場で、今、現在、作陶活動を通して人と人との繋がりが生まれている原点が、この体験にあると言っても過言ではない。この窯場には、登り窯、穴窯の他に赤絵窯、塩釉窯など、8 基もある。窯場から富士山が一望できる絶景ポイントでもあり、池田氏は富士シリーズを発表している。電気窯やガス窯と違い、薪窯は、一人で焚くことが時間的に困難で、ほとんど不可能と言って良い。最低、3~4 日以上かけて、人から人へと作業を繋いでいく駅伝のようなものである。一人が自分勝手に温度を上げたり、リズムを壊したりすると、その代償は必ず表れ、窯焚きはうまく焚けずに失敗する。ここで、20 年程、窯焚きの楽しさ、厳しさ、難しさを教わった。今の私の作陶活動には、その教訓が生き、大変役立っている。

只今、私自身は窯もなく、工房もなく、時間もあまりないけれど、あちこちの知人の貸窯やグループの窯で、仲間と助け合いながら、作品作りを行っているというか、させて頂いているのは大変ありがたいと思っている。自分の工房や窯を持つ日が来るまで、当分の間は台所の前にブルーシートを敷いての作陶を続けることになる。



「釉象嵌彩飛棒平壺」

夏の終わりに赤トンボが群をなして飛ぶ姿が走馬灯のように心に蘇る。高校三年、受験生。昆虫に夢中になり、野山を走り回っていた。

第 4 回京都・やきもの倶楽部作品展 会長賞受賞

今まで出会ったあらゆる人々、ご指導していただいた先生方に心から御礼申し上げます。特に最近、料理人さんと会話をしながら、陶器や漆器の販売の仕事をしており、作陶の時間が休日しか取れない状況ですが、これは、自分の作陶活動に必ず役に立ち、将来に繋がっていくことと信じて、これからも頑張っけて参ります。どうぞ皆様、よろしくお願ひ申し上げます。



「緋色貝目大壺」

篠原土や黄の瀬土を使い、炎の色(緋色)を背景に貝目は星雲、長石の粒を星に見立て、独自の宇宙空間を壺で表現した。

第 3 回京都・やきもの倶楽部作品展に出品

私の作品自慢

穴窯との出会い

会員 寺西 健二

私は陶芸を始めて 20 年近くになるとうし、これまで多くの焼物を焼いてきました。どのような焼物を焼いてきたかと言うと、最初は地域のサークルに入り公民館の電気窯を借りて焼いていまし

た。サークルでは、粘土をひねって形を作り、削り、そして素焼きをしました。この段階までは自分で言うのも何なのですが、そこそこの器になるのだらうなあと期待できる形でした。「さあ釉薬を掛けて本焼きだ！」そして、期待して窯から出てきた作品は、ぼてぼてとしているものや、色が軽いもの、酸化で焼いているので深みが今一つでした。それではリベンジと、いくつかの釉薬を掛け分けたり、重ね掛けたり、工夫をしましたが、釉薬の知識や根気が無く、また自分で作ることもできずに悶々としていました。そんなこんなで釉薬はあきらめて、多様な粘土を手びねりで積んでいき、表面を削り整え、そして釉薬はほんの少し吹き付ける方法での作陶が主なものになりました。それが次の作品です。(写真1)



写真1 電気窯焼成 「土彩の風」
高 55×幅 45×奥 15 (cm)

釉薬の知識を深めたいと思いながら、ままたまならず、作陶していたのですが、さらに陶芸の幅を広げたいと思い、他のサークルにも入会しました。このサークルでは大きなイベントとして、年に1回穴窯を借りての作品づくりに取り組んでいました。お隣の市にある穴窯での焼成作業は、会員の交流をさらに深めるため、春であれば、山菜や筍を手に入れて屋外での天麩羅や、竹筒にお米を詰めて炊いたり、竹筒にお酒を入れて燗酒など野趣あふれるイベントを窯焚きと同時にし、会員の交流がさらに深まったものです。

この穴窯で焼き上げた作品は、今までの私の悩

みを吹き飛ばすものでした。火の神様は、私の作品に素晴らしい焼き色を付けて下さり、それぞれの作品に異なった景色や風合いを持たして下さいました。この出来事は、ひとつのカルチャーショックで、そして穴窯初体験で焼きあがった作品が次の作品です(写真2)。



写真2 穴窯焼成 「流釉」
高 35×幅 55×奥 20 (cm)

この作品を焼いたのは10数年前になりますが、鮮明に覚えていて、窯詰め位置は焚口の手前から1列目、下から1段目左壁沿いに詰めてもらいました。さあ窯出しです！心躍り、わくわくの作業です。焚口両側の作品は、灰被り、焦げ、窯変等、どうしてもこんな風に焼けるの??? 理解不能なすばらしい出来栄えの作品でした。いよいよ、わが作品の番です。外から少し見えた時には、何かそこだけ光り輝き、まるでかぐや姫が竹を割って出てくる時のような輝きを放っていました。実際にはそんなことはあり得ませんが、我が心にはそのように映りました。出てきた作品は、肩から自然釉が滝のように流れ落ちて、口の周りはゴマ様の景色で、裏側は薄い緋色となっていました。他にも花器、徳利やぐい飲みを焼きましたが、私にとってはすばらしい緋色でした。2回目の穴窯では、壺の側面に火が走り流れた跡が焼き付けられており、炎という絵具で陶のキャンバスに、一定の形を持たない炎が形を持つ出来事に感動を覚えたものです。(写真3)



写真3 穴窯焼成 ^{かえん}「火炎」
高 35×幅 45×奥 45 (cm)

穴窯でこのような体験ができたので、これ以後穴窯の魅力に惚れ込んだわけです。この経験から多くの穴窯を知りたいと思い、自分の窯ではないのですが、現在は3か所の穴窯で1年に5回程度の穴窯焼成に参加し、他にも2か所で窯焚きを経験してきました。穴窯について感じることは、窯の大きさや形状に同じものではなく、焚き方も人それぞれで、焼きあがる作品は同じものはありません。火の神様が陶にいろいろな景色や風合いを持たせてくれることや、稀にギャラリーで〇〇万円している作品と見間違える作品が出て、心躍る体験が出来るのが穴窯の面白さでもあると思います。一方で、同じ穴窯で似たような窯詰め、焚き方をしても同じように焼けることはなく、意図的にいくら頑張っても同じ作品ができないこと、これも穴窯の魅力だと感じています。穴窯の魅力に取りつかれると「身上つぶす」と、どこかで聞いたことがあります、それほどの魔力を秘めていると思います。

穴窯で焼きあがる作品は素晴らしい魅力がありますが、作品が出来上がるまでの過程、すなわち成形、窯入れ、窯焚き、窯出しとそれぞれの過程で、距離の近い人間関係は、陶を通じて人との繋がりが深まっていき、さらに人の魅力の奥深さを感じる事が出来るツールだと感じています。

5月の連休に京都府綾部市で京都やきもの倶楽部前会長の森田隆司先生の「工房」兼「妙徳寺 穴窯」で穴窯が焚かれます。昨年の12月20日に『綾部 妙徳寺 穴窯焼成のお誘い』と題し、会員の皆

様方に案内が行っていると思います。そこには、締切が平成29年2月28日となっていますけれど、もし窯に余裕があれば追加で応募も可能だということであり、また見学だけでも可能だということなので、詳しくは森田隆司先生まで問い合わせをお願いします。

穴窯未経験の方はこのようなチャンスは滅多にないでしょうし、是非応募されて魔力の一部を味わっていただければ、きっと素晴らしい経験が出来て、陶芸の見識が広がると思います。

参考スケジュール (平成29年)

4月30日(日)	窯詰め
5月1日(月)～5日(金)明け方	窯焚き
5月13日(土)	窯出し

陶芸技術ノート

石膏型を使った小鉢の制作

陶芸家 今井 真正

石膏型を使った制作は皆様にとってもすでにおなじみの技法をかもしれませんが、少しアイデアを絞っていろいろなチャレンジをしてみればいかがでしょうか？今回はあまり私もやったことがない作り方を試してみましたので、皆さんもぜひご参考にしてください。

石膏におなじみの方にとっては、簡単に型が作れるので私も大変便利に使っておりますが、なじみのない方は、むつかしく、面倒なことと考えられているかもしれませんので、簡単に説明します。

石膏は理事の井上顔料さんでいろんな種類のものが販売されておりますが、私は通常、特級というものを使っております。お近くで手に入らない方は井上顔料さんで送ってもらえます。また東急ハンズなどでも置いていると思います。湿ってしまうと使えなくなるため、長期間のストックができませんので、あまり買い込まないようにしましょう。

今回、使ったような凸型のものは、例えば轆轤で内側の形だけを作って、それに石膏を溶いて流し込めば簡単に作ることができます。まずは石膏の溶き方から簡単に説明します。

1. まずボール等に必要な量の水を張ります。そこに石膏の粉をダマにならないように少しずつ入れていきます。使わなくなったお茶碗等に半分ぐらい石膏を入れパラパラと落としていくとうまいくと思います。

2. 石膏の入る量は慣れるまでは難しいのですが、水面ぎりぎりまで石膏を入れるのが基本です。水の中に石膏を入れていっても、水面の位置はあまり変わりません。ゆっくり石膏を入れていくとだんだん底から石膏がたまっていき、水面ぎりぎりまで来ると、うっすらと水の層が見えると思います。さらに石膏をいれ、水の層がちょうど見えなくなった所が石膏の適量です。

ひとつ注意していただきたいのは、石膏は静かに落して行き、途中で絶対にかきまぜないようにしてください。またこれに時間をかけすぎると、うまいくいけませんので、ゆっくりと、かつ手際よくやってください。

3. 石膏を適量まで入れたら、今度はスプーン等でゆっくりとまぜ合わせます。なぜゆっくりかというと、激しくまぜ合わせると気泡が入り最終的に型の表面に気泡が出て表面がブツブツになってしまいます。あまり長い間まぜてしまうと、反応速度が早まり、流し込む前に固まってしまうこともありますので、スプーンで100周程度を目安にまぜ合わせてください。

4. まぜ終わった石膏を原型にゆっくりと流し込みます。これも気泡が入らないように慎重に素早

く作業を行ってください。あとは固まるのを待つだけです。季節にもよりますが、5分から10分で硬化します。硬化した後に、硬化熱が出て、さわるとほんのりと温かくなってきます。このぬくもりが取れば、ほぼ硬化したと思ってください。

この作業は、水平なところでやるように気をつけてください。ひっくり返して使うため水平が取れていないと非常に使いづらくなりますので、注意してください。

5. 1時間程度放置し、完全に硬化したら、流し込んだ型から石膏を外してください。水で流しながら、耐水ペーパー等で表面を綺麗にしてでき上がりです。

実際に型を使用するには、十分に乾燥することが必要です。これには時間がかかりますので、風通しの良いところで、芯までしっかりと乾燥させてください。ここでの注意点ですが、急いで窯やストーブ等で熱をかけて乾燥させると、石膏がもろくなりますので、これはしないようにしてください。

ひとつ型を作ると、上手に使うと何十年も使えますので、大切に扱ってください。衝撃には大変弱いので、保管するときには注意してください。

さて、いよいよ成形です。ここからは、写真に沿って、説明していきますので、参考にしてください。



1. まず作るもののサイズを安定させるため、土の量を決めてハカリで計りましょう。今回は200グラムで制作する事にしました。



2. 今回は、花びら型小鉢をつくります。あらかじめ石膏型に柔らかい鉛筆で、でき上がる形を描いておき。この線に沿って粘土を広げていきます。まずは伸ばしやすいように手の中で土を広げてそれを石膏形に載せます。



5. 花びらの部分を丁寧に広げていきます。広げると言うより、先に向けて延ばしてゆくといった方が適切かもしれません。



3. 手のひらでたたきながら、均一に土を伸ばしてゆきます。轆轤をまわしながら、偏りがないように注意してください。



6. 広げていくときの注意点は、やはり均一に、かつ先に行く程だんだん薄く作っていくことが、重要です。型に描いた線に沿って、すばやく丁寧に土を広げてゆきます。また全体の曲線も美しくなるように整えていきます。



4. 凹んだ部分の土を締めます、この部分は乾燥のときや焼成したときにきれやすいので注意します。



7. 今回は、手で押した感覚を残すために、指あとを丁寧に残していきます。



8. 形ができたなら、今度は高台をつけます。水をつけるのを忘れずに……。

9. 私は、いつもせっかちなので今回は、作業効率を上げるために、ドライヤーで乾かします。また、丸い普通の高台では面白くなかったため、割高台にしました。





10. 均等にあたりの墨を入れ、槍カンナで鋭く切り取っていきます。手で押したやわらかい部分と切り取った鋭い部分のコントラストをつけます。この型ですと、高台をつけないところんでしまうので、高台をつけましたが、3つ足をつけてもいいかもしれません。



13. 最後はヘラと指で仕上げます。



11. 丁寧に型から外します。少し置いておくと石膏型が土の水分を吸ってくれるため外れやすくなりますが、今回は最後に縁を仕上げる作業が残っているため、少しやわらかいうちに型から外さなければなりません。形が変形しないように慎重におこします。



12. 型から起こした状態の小鉢ですが、このままでは、ちょっともの足りなかったなので、小技を使って少しシャープなものにしました。



14. これで小鉢の出来上がりです。

ということで、小鉢が出来上がりました。焼成する時間がなかったので、写真はここまでですが、3月の穴窯で焼いてみようと思います。

私は日頃あまり食器は作らないので、これで家内にどや顔ができると思います。

この方法で作ると、どなたが作ってもある程度揃ったものができると思いますので、皆さんもぜひ挑戦してみてください。

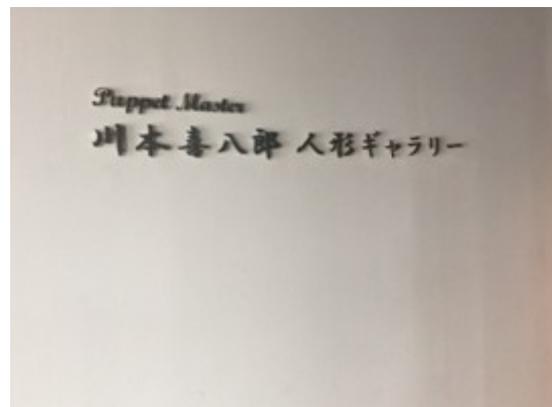
また、石膏型には、まだまだいろんな可能性があります。鑄込み用の型であれば、同じものが労せず大量につくれたり、ひねり成形において画期的に作業効率を上げることができる型があったり、いつも邪魔をする重力に耐えながら成形ができたり、使い方によって可能性がグンと広がります。

最後に今回は自分で原型を作って型取りをする説明をしましたが、市販のボールやバケツ、百均で売っている様々なものから石膏型を作ることができますので、皆さんも独自の工夫をして挑戦してみてはいかがでしょうか。

の人形でありながら、照明や顔の向き、肩や腕の動きによって、見るものに感情を訴えてくるよう工夫されていました。悲しいときは人がするように肩をがっくりと落とし、首をうなだれ、また怒ったときには肩をいからせるなど、表情豊かな人形たちの演技に思わず引き込まれる人も多かったことでしょう。

この、人形劇『三国志』のために、全部で300体ほどの人形が作られたそうですが、その人形制作を任されたのが川本喜八郎氏でした。

アニメーション作家・人形美術家で、紫綬褒章（1988年）勲四等旭日小綬章（1995年）などを受賞されています。



川本喜八郎 人形ギャラリー
場所は渋谷ヒカリエの8階にあります。

展覧会見聞録

川本喜八郎人形ギャラリーを訪ねて

陶芸家 寺池 尚孝

私が、初めて三国志というものに興味をもったきっかけ、それはNHK総合で放映されていた、人形劇『三国志』でした。紳助竜介が、紳々竜々という役でドジな役で登場しながら、ストーリー展開をサポートしていました。そういったおふざけ要素もありましたが、人形劇でありながら本物の水や火を使うなど、リアリティーを追求しており、カメラアングルも相まって、とても引き込まれ、毎回欠かさず見ておりました。

人形劇『三国志』のクオリティーを最大限に上げる事に貢献したのは、俳優（声優）陣はもちろんですが、人形ではなかったかと思えます。一体



ギャラリーの中は写真撮影禁止となっており、今回は、三国志と平家物語を展示中でした。

そんな川本氏の作品を、無料で見る事ができるスペースがあると聞き、今回川本喜八郎人形ギャラリーを訪問しました。存在を知らないと、なかなか訪れない場所にあります、外の展示を見るだけで期待が膨らみます。

通路を奥に進み、自動ドアから中に入ると、その先には懐かしい三国志のキャラクターがガラスケースの中におります。会場内には、監視の人もいないので視線を気にせず楽しむことができます。

(私が訪れた際は、お客様もおられなかったので、貸切状態でした。)

まずは「黄巾の乱」時代のキャラが個性豊かに待っております。協皇子・辯皇子とかもいい感じに操られてる感を漂わせながら座っておりましたし、張角なども野性味溢れる姿で描かれておりました。そして、今回のメイン「千里行」赤兎馬に跨る関羽と張飛が一騎討ちする場面が再現されておりました。

一体一体が精密に作られており、人形の姿に躍動感があるのはもちろん、見る角度によって様々な表情を彼らは見せてくれます。とても悲しげな表情になったり、怒っていたり……。最初は、人形なのでちょっと外見が違うだけじゃないかと思っておりましたが、それぞれがとてもいい表情をしていて、その人物像が表情に刻まれているような気がしました。関羽はやっぱり義の人って感じに(思い込みかもしれませんが……)

また、会場奥では平家物語を展示していましたが、こちらは初見だったので、名前を見ずに姿・表情を見て、誰なのかを一人一人想像しながら楽しみました。(笑)

こちらのギャラリー、入れ替えもあるようですし、ワークショップをする日もあり、人形のからくり説明や人気の人形との撮影会もあるようです。渋谷区が気軽に身近で楽しむアトスポットとして、常設展示している川本喜八郎人形ギャラリー、東京に行かれた際には少し時間があるようでしたら訪問されてはいかがでしょうか？

■ 川本喜八郎 人形ギャラリー

東京都渋谷区渋谷 2-21-2 渋谷ヒカリエ 8階
開館 11時～19時 料金 無料

https://www.city.shibuya.tokyo.jp/est/kihachiro_gallery.html

また、これに関連して、有料ですが、次の美術館でも多くの人形が展示されています。

■ 飯田市 川本喜八郎 人形美術館 長野県飯田市本町 1 丁目 2 番地

TEL 0265-23-3594

FAX 0265-52-3594

<http://www.kawamoto-iida.com>

活動報告

第 4 回京都・やきもの倶楽部作品展 開催

開催日：平成 28 年 11 月 8 日～11 月 12 日

今回の作品展は京都市勧業館“みやこめっせ”で開催した。この会場は最初の作品展が行われた思い出の場所であるが、その時と違って展示場をギャラリーB からギャラリーA に変更した。こちらの方が部屋の形が正方形に近く、中央のスペースも展示に使えると考えた結果である。会期中は、秋の京都観光で賑わう中、350 名に上る多数の方々に作品をご覧頂いた。

作品展には会員 25 名、賛助出品者 8 名の参加があり、出品総数は 51 点であった。そのうち、会員作品 43 点の中から秀作 7 点に京都・やきもの倶楽部会長賞、副会長賞、吉村賞、奨励賞(2)、清水焼の郷賞(2)が授与された。この中で、吉村賞は、本年度から理事に就任された吉村楽入氏を審査員に迎えて、新たに設けられた賞である。

今回の作品募集に当たっては、できるだけ大きさ制限を無くすという趣旨で、大小 2 作品を募集することにした。大は 40×40 cm で、高さ制限なし、小は 20×20×20 cm、また、壁掛けの場合は無制限とした。さらに、募集中に“少しオーバー

するかどうか？”という問い合わせもあったが、それも大目に見ることにした。その結果、最大は91×171×10 cm、最小は6×6×6 cmの作品が出品され、偶然にもその2作品は共に入賞した。初めての、この試みは、展示がうまくできるかどうか不安もあったが、何度も配置換えをしながら真剣に作品を並べて頂いた審査委員の先生方のお陰で、これまでにない豪華な展覧会場となった。

会期最終日には、今井会長を初めとして5名の審査員の先生方にご出席いただき、出展作品の講評会が行われた。受賞作品に関する講評についてはこの後発行された作品展図録に掲載されている。

京都・やきもの倶楽部ホームページ 公開

公開日：平成28年12月8日

平成26年の第1回運営委員会において、ホームページ作成の議題が出てから、およそ3年近くにわたって検討を続けてきた。一般的に、組織としてのホームページ作りは専門の業者に依頼して行われており、その立ち上げのみならず、維持管理には高額のコストがかかるとともに、その内容の更新についても自由に行うのが難しいという問題があった。さらに、このことは本倶楽部のようなボランティア組織ではとても手の届かない状況であることが判ってきた。そこで、当倶楽部の編集委員会を中心にして会員手作りのホームページ制作に挑戦し、四苦八苦しながらも、ようやくホームページをアップロードできる状態にまで至った。

これを持続可能なホームページにしてゆくには、どんどん中味の更新を続けることが求められるが、今後は、編集委員会を中心として、内容の充実を図って行きたいと思っている。そのために、会員の皆様には、これまでに増して、倶楽部発展のためのご協力をお願いしたい。まずは、下記URLを検索エンジンの「お気に入り」に追加しておいて下さい。

URL: <http://yakimono-club.org>

検索: [京都・やきもの倶楽部](#)

特別講座「黒楽茶碗」開催

昨年の特別講座「赤楽茶碗」に続いて、今年は「黒楽茶碗」に挑戦した。前回と同様、京都・やきもの倶楽部と清水焼団地協同組合との共催で、吉村楽入先生にご指導をお願いした。制作は2回に分け、日時と場所を変えて行われた。

前半の成形と削りは、平成29年2月4日に清水焼の郷会館1階多目的室で開催され、理事1名、会員17名、一般7名の合計25名が参加した。後半の施釉と焼成は、平成29年2月26日に京都烏丸九条下るの「楽入窯」で開催された。参加者は、理事1名、会員14名、一般4名の合計19名であった。

前回の赤楽焼成に比べると、黒楽では1200度近くの高温で焼くために、重油窯の状態は窯の入り口の隙間や窯の上にある煙突から赤い炎が吹き出し、そこに自分の作品を長い火箸で挟んで短い時間に素早く出し入れするわけであるから、順番を待つ現場の空気は緊張感に包まれていた。この体験の後は、参加者全員ホッとした気持ちと出来上がった作品の出来映えに何とも言えない幸福感を満喫していた。

現在、この行事をまとめた図録の作成に取りかかっており、4月中には発行の予定である。

平成29年度 総会・懇親会 開催

開催日：平成29年2月4日

本年度も清水焼の郷会館1階多目的室において総会が開催された。参加者は理事2名、会員11名、委任状20名で、総会成立とともに、議事案件はすべて承認された。詳細については、すでに配布されている総会報告書に記載されている。

なお、残念であったのは、総会参加者の数が、この総会前に開催された楽焼行事に参加された数に比べて少なかったことである。総会は倶楽部の運営に関して意見を言い合える唯一の場であるので、是非とも多くの方々に参加して頂き、この倶楽部の発展のためにご協力をお願いしたい。

本総会での主要な議案は以下の3点であった。

■ 会則改正

従来、副会長は1名としていたが、昨今の各種

行事開催、会報や図録の編集、ホームページの維持管理等、運営業務の増大に対処するため、副会長を2名に増やし、会長補佐の役割を分担することとした。

■ ホームページの維持管理

ホームページに個人名が出ることには細心の注意を払う必要があるとの意見が出され、運営委員会において、再度検討することとなった。

■ 第5回作品展開催

今年度も作品展を開催することとなり、その期間と場所を

期間：平成29年10月31日～11月4日

場所：京都市勧業館「みやこめっせ」

美術工芸ギャラリーA室

に決定した。

総会終了後、新・都ホテル（京都）中国料理「四川」で恒例の懇親会が開催された。

会員便り

個展・グループ展・公募展

（平成28年10月～平成29年3月）

京都・やきもの倶楽部に所属されている方々の展覧会で、機関誌「倶楽部だより」に掲載されたものをまとめています。会員各位の活動状況をお知らせするために設けました。掲載希望の方は、どのような規模の展覧会でも結構ですので、ふるっしてお申し込み下さい。用紙は、「倶楽部だより」に添付されている展覧会情報掲載申込書をご利用下さい。

平成28年

■ 9月13日～9月25日

アートギャラリー 2016

文化パーク城陽（京都府 城陽市）

根本 都男（入選）、増田 淳三（入選）

■ 9月14日～9月20日

現代工芸近畿会 アート de コラボ 掌品展

高島屋京都店 6階 美術画廊（京都市）

森田 隆司

■ 10月1日～10月2日

第22回 山中陶芸教室展

天理市文化センター 1F 展示ホール（天理市）

稲垣 薫

■ 10月5日～10月11日

“京都工芸の精華 2016” 展

京都高島屋6階美術画廊（京都市）

今井 真正、加藤 丈尋

■ 10月6日～10月10日

陶芸&布小物 二人展

けいはんな記念公園 水景園 観月楼

1階ギャラリー 月の庭（京都府 相楽郡）

久保田 忠男

■ 10月28日～12月4日

改組 新 第3回 日展

国立新美術館（東京都 港区）

加藤 丈尋（入選）、森田 隆司（入選）、

和田 真理子（入選）

■ 11月8日～11月12日

第4回 京都・やきもの倶楽部 作品展

京都市勧業館 みやこめっせ

美術工芸ギャラリー A（京都市）

京都・やきもの倶楽部

■ 12月10日～1月15日

改組 新 第3回 日展 京都展

京都市美術館（京都市）

加藤 丈尋（入選）、森田 隆司（入選）

凡例

■ 開催期間

展覧会名

展覧会場（開催地）

出品者名（入選、入賞）

編集後記

今朝、テレビを見ていると、ある小学校では、「卒業する生徒の描いた絵が、戦時中を除いて100年前からすべて保存されていた」というドキュメントを放映していました。地元に住んでおられるお年寄りが集まって、その絵を眺めながら、楽しそうに喋っておられるのを見て、何故かホッとした感じになりました。これが、我々日本人が背負っている文化であり、伝統なのでしょう。この大量の絵は、地元有志の手によってデジタル化され、展覧会も催されていました。

この映像を見終わって、それでは、我々のやきもの倶楽部はどうだったかと思い、昨年公開した倶楽部のホームページを開いて見ました。なんだかんだと言いながら、倶楽部設立から今年でちょうど丸10年になります。ホームページの中で、「活動」のページには、倶楽部設立の時から歩みが掲載されています。月日が経つのは早いものですね。この間の各行事の内容については、最近のものしか載っていません。これから、資料のあるものについては、順番に埋めて行く予定ですが、全部というわけには行きません。皆様の中で、設立当時の写真や資料をお持ちの方がおられましたら、是非ともお知らせ下さい。可能な限り掲載して行きたいと思います。

これからも、この倶楽部の素晴らしい伝統・文化を創り上げるべく、会員の皆様方にはご尽力の程、お願い申し上げます。

(編集委員 片岡俊彦)

[京都・やきもの倶楽部 ホームページトップに戻る](#)